

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第1章)報告会「虎舞を演じてきて」 (2021)
Author	文, 森山 真由子, 今井 美帆, 村上 和司, 遠藤 遼之助, 川端 克則, 山本 和馬, 井 原 未来, 橋本 裕之, 関 典子, 中川 眞
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 29 卷, p.1-16.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-44-0
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	阪神虎舞の誕生：被災地芸能の文化的脈 絡の拡張
DOI	10.24544/ocu.20220516-056

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第1章

報告会「虎舞を演じてきて」(2021)

文（ダンスボックス、司会）、森山真由子（阪神虎舞）、今井美帆（同）、村上和司（同）、遠藤遼之助（同）、川端克則（同）、山本和馬（同）、井原未来（同）、橋本裕之（大阪市立大学特別研究員）、関典子（神戸大学大学院准教授）、中川眞（大阪市立大学特任教授）



報告会〔日時：2021年12月23日、場所：DANCE BOX〕

現在の位置

文：阪神虎舞がスタートしたのが2018年です。2018年に城山の皆さんに神戸に来ていただいて、私たちは初めて虎舞を体験しました。その感想は、本当に凄いなって一言でした。これまで、たくさんのダンスやそれ以外のいろんなものを見てきたけれど、こんなに文句なしに見てしまうものがあるのかっていう思いでした。舞手のエレガントさと華やかさ、そして虎そのものになるという感じ。虎頭をかぶるだけであんなに変わるんだってということがとても衝撃的だったのです。身体に染み付いた芸能を見せられたので、皆さんの取り組みでは、魂ごと乗り移るみたいなことができるのかなと、これは実験だと思いながら、少し距離を置いて見てきた部分がありました。

結果、3年経って2021年3月に民博で舞った時には、虎舞が自分たちのものになってきたなという印象をすごく受けました。またアランと一緒に、まだ新たな演目までにはいかないかもしれないけれど、挑戦する方向性でいるということや、和馬君と遠藤君で少し自由に何か新しいことができる「余白」があることが、阪神虎舞の魅力の一つかなと思います。オリジナルの手踊りや、女性だけのオリジナル演目も早く見て見たいなと期待しています。今は城山虎舞の音をお借りしながらやっていますが、そこは少し勿体ないな一って思っています。舞うのが精一杯で、太鼓や笛や新たな音楽っていうところまでは人数的にもいってないのが現状ですね。もう一段階上がるために、人も増やして太鼓や笛の人も含めた構成ができると、より活動がしやすくなるのではないかと個人的には思っています。正月早々仕事がありますが、広く皆さんに知ってもらえる機会だから活動を広げていきつつ、さらに上手くなってレパートリーも増えるっていう良い循環を生み出していけるチャンスになればいいなと思っています。

今日は皆さんの話を聞く機会です。メンバーは最初からいるので3年半しっかりやってきたなと思います。そこに川端さんという本場（大槌町）で活躍されていた方が参加してくださり、初めて見た時どう思ったか、稽古のやり方など、そのあたりの正直な感想をお聞きできたら嬉しいです。よろしくお願いします。

森山：まず身体に馴染んできたなっていうのは一番に思います。細かいところまで意識してできるようになったし、言われたことに対してトライできるようになったという感覚はあります。ただ次の段階にはなかなか進めていないなって。最初からやりたいと思っていた女虎のオリジナルになかなか進めていけない



阪神虎舞（2021）

です。女性だからこそできる舞をやりたいという思いは最初からあるのですが、そこに着手できていません。具体的なイメージが私にできてきているわけではないのですが、なんとなくやりたいっていう思いはまだ持っています。やっていくにあたって、やっぱり課題は音楽ですね。オリジナルの音楽作らないとなってしまう思いがあります。

今井：入ったきっかけは、体を動かし続ける場所が欲しいという、とても個人的な思いがありました。実際に演舞を披露する機会ですら、ずっと関わってきた舞台とかダンスと虎舞の間には、芸術と芸能の違いみたいなところがあるなと思います。虎舞はすごく生活や日常に近いなって。できたときの手応えとか、稽古でももちろん感じるんですけど、本番の場の空気感とかにとっても影響されていて面白いなと思います。こういう郷土芸能的な活動の仕方は関西にはあまりないので、新鮮だなと思っています。私自身、お祭りとか踊りとかいったものが身近ではない環境に育ったので魅力的だなと思いますし、自分が培ってきて染み込んだ身体を使って何かするっていう延長線上に、地域と関わりのあるものがあるということが、自分にとってとても歓ばしいことです。技術的にはまだ全然なんですけど、このまま続けて、もっと発展していけたらいいなと思います。

文：ありがとうございます。すごいキーワードがたくさん出たように思います。それを受けて村上さんはどうですか？

村上：2018年に初めて城山虎舞をダンスボックスで見せていただいた時に、すごいな、本物の虎みたいだと思いました。実際にやって見て、最初はしんどくて。でも3年続けてきて、本番の場数も踏んで来て、こなれてきたなとは思いますが。ずっと城山虎舞の印象が強く、もっと稽古しないと思ってしています。始めた時に思っていたことに戻るんですけど、阪神虎舞ってなんやっていうことをここ一週間くらいずっと考えていて・・・。女性がいる阪神虎舞ってすごいなって。女性だけの演目とかも作れたらいいなと勝手に思っています。でもどこまで攻めていいのかなとも思います。僕としてはもっともっと稽古してこなれていかなければならないと思います。最初の頃、僕はオリジナリティ出したいって発言したんですけど、何がオリジナリティなのかなって全然わからないです。

文：最初に始めた時には、結構早い段階で新しい演目に着手するかなって思っていたんだけど、3つの演目の質を追求することにみんながシフトしていったので、そっちにいくんだなと。それはとても賛成なんだけど、最初思っていた展開とはちょっと違っていたかなとは思いますが。

遠藤：僕は2011年の震災当時は学生だったんですけど、色々やれ切れなかった思いが心の中にありました。そういった時に虎舞に参加しませんかってお話をいただいて、震災は過ぎたけどそういったものに関われるのかなと思って、縁とか不思議なものを感じて参加させてもらいました。最初に城山虎舞のワークショップ受けた時には、まあまあこんなもんかって正直思いました。郷土芸能はすごいなって。その程度だったんです。

でも大槌町でお祭りに参加させてもらった時に衝撃を受けました。ワークショップでは彼らは本気を出していなかったんだなって。虎舞ってものはお祭りのためにあるんだなって現地について感じました。それまでの普段の自分のダンス活動について、劇場などでの見る人と演じる人って分かれている対面形式があまり



城山虎舞（2018）

り気持ちいいなどは思っていなかったんです。でもお祭りでやる虎舞ってというのがパーフェクトな状態、完成された状態なんだなど。見る人と演じる人が同じ空間にいて、神社っていう場所があって完成するものだと思います。ダンスっていう単体だけではなくて、場所とか人とか全て揃って一つのものになるっていうことがダンサーの自分にとってとても衝撃的でした。

お祭りを経験して、こっちでも同じようなことができたらいいなと思っています。でも状況が違くなって思います。東北では虎舞が必要とされているけど、新長田では僕らから発信していかないといけない状況です。だからどう継続していくのかってことが難しいなって、工夫が必要だなと思っています。地域に必要なされていないからこそ何か積極的にやっていくことも最近考えています。新しいチャレンジには今まであまり興味がなかったんですけど、これからはチャレンジしていくのもありなのかなと思っています。

文：意外です、遠藤君がその新しいチャレンジに今まで興味がなかったのが新鮮でした。

遠藤：大槌で体験したお祭りが本当にすごくて。最初はアレを身体に移し取ろうって思いがあったんです。やっぱり3年やっているとある程度身体に馴染んできて、気持ちの変化にも影響しているかなと思います。ただ難しいのは音楽ですかね。発展していかない理由の一つに、ずっと城山虎舞の音源を使わせてもらっていることがあるのかなど。即興とかだと化学反応みたいなきっかけが起きると思うんですけど、ずっと城山虎舞の音源を使わせてもらってる限り、クラシカルなままなのではないかなと思います。

新しい試み

橋本：民博のオンライン公演の時にアランと一緒に やりましたよね。あれ城山メンバーとか釜石の方ではとても評判いいんですよ。面白くなって。今後アランと一緒にやっていくことで可能性が広がっていくと思いますが、どう思われますか？

遠藤：可能性として日本の文化じゃない音楽と一緒にやるってこともあるのかなと思います。新長田でするってなったら、アフリカン以外にも可能性はあるのかなとおもいます。

文：なるほど、新長田だったら奄美の人とかいろいろいるよね。コリアンも色々いるね。「ゆるめるモ！」もやったね。

森山：あれはあれでエンターテイメントとして一つ可能性があるなと思います。

橋本：「ゆるめるモ！」の後、あれを出発点の一つとしてあまり考えてこなかったですね。あれはとても衝撃的でしたね。

森山：アランとの即興は舞台芸術の一つの手段としてやった感じですね。アランの音楽と虎舞のコラボという感じ。「ゆるめるモ！」は本当に芸術とか舞台芸術とかそういうものにもあまり興味がない人たちでも分かりやすいエンターテイメントという感じでしたね。別にどっちがいいとか悪いとかではなく、手段の一つとしてそういう方向性もありかなと思いますね、ポップスに合わせるとか。

文：では川端さん、どうぞ。

川端：初めて阪神虎舞を知ったのは2021年の1月後半くらいです。城山の菊池さんと食事をする機会がありまして、大阪に転勤して仕事するんですってお話しをしたら、神戸に阪神虎舞というところがあるから良かったら行ってみてよ、みたいな感じで聞いたのがきっかけでした。そこから気になりだしてFacebookとかで調べたりしました。正直、最近始めた人たちだから遊び半分っていうかそこまで本気でやってないんじゃないかなっていう気持ちがあったんです。でも練習を見に行った時に、気合の入りが違うなと思って。自分も小さい頃から虎舞やっていたんですけど、自分よりもキレがすごい入ってて、練習も熱心で。入る隙がないな〜って思ったのが最初の印象です。

民博のYouTubeも見させていただいたんですけど、新しいことに取り組んでいるのはすごいなって思いました。自分も小さい頃からやっているの、何かを変えようという気持ちは最初なかったんですけど、皆さんの新しいことにどんどんチャレンジしていこうという姿勢を見て、郷土芸能は郷土芸能でいいですけど、新しいチャレンジはすごい新鮮で面白そうだなっていう思いはとてもあります。でもいざ何かあるかなって考えてみても全然思い浮かばなくて。そんな中でもいろんな楽器に合わせて踊りをやっている姿を見て、違う土俵に立ってるって言うか、自分だけ頭が固いなって思いました。毎月ちゃんと稽古に行つて太鼓をやったりとかしたいなって思ってるんですけど、なかなか仕事の都合がつかなくて行けてなく、歯がゆい状況ですね。

山本：コロナで1年以上はストップしていたし、月に1回の稽古で、本番があったらそれに向けて稽古するっていう感じのペースなので、3年半やってきたっていう実感があまりないですね。僕は適当なので、型通りにやっているかと言われたらやっていないと思いますし、自分がこういう風に見えたらいいなっていうことを勝手に考えてやっている状態ですね。城山さんのやり方っていうのは僕たちにとっては基礎になります。教えていただいた形なので、できている状態のものを壊すっていうことを僕はしていませんが、開き直つてどんどん新しいやり方を見つけてそっちの方がいいと思つたら、そっちにいつてもいいんじゃないかなと思つています。ど

んどんアレンジする形に最初から僕はなっていましたね。阪神虎舞はお囃子もないし、踊り手もずっとやっている感じでもないし。そういったなかで自分たちをどう見せるかっていうこと。その過程の中でアランとのセッションなど色々な方法は試してきたつもりです。阪神虎舞っていう名前で行っている時もあるけど、遠藤さんと2人で勝手にやっていた時もあるんですけど。どんどん新しいことをやっていかないと、次に進まないと思うんです。今の状態の稽古を維持しつつ、女性だけの舞を作るとか、大槌や釜石に行く時に何をしたらいいのかなとか。これまでは、そういう状況になった時に焦って、教えていただいた3演目+アランとのセッションで乗り越えてきたっていう現状なので、有言実行はしたいですね。なかなかスケジュールが合わないですが、イベント出演のオファーも増えてきたので、今こそ本腰入れてやるタイミングなのかなと思います。

動物を踊る

関：阪神虎舞は、3月頃このプロジェクトへの参加が決まった直後、4月3日のワークショップに参加し実際に拝見・経験させていただいたのと、4月16日の廣田神社での舞を拝見した、その2回しか触れたことがないので、今日、皆さんのお話をお聞きして、現地の祭りの中の城山の方々の虎舞を是非拝見したいなと思いました。

私がここに参加させてもらってるのは、伝統芸能と新創造というクリエイティブな部分に関われたらという立場でいると思います。クリエイティブのヒントになるかなと思っていて、少しだけ要約してお話ししてみたいと思います。

一つ目は、動物を踊ることの面白さと難しさがあるなと感じました。初めて見た時も、虎の頭をかぶって装束を着ていたの、「虎だな」「人が虎を踊るんだな」って認識したのですが、「本当に虎に見える」瞬間があったらいいなと思いました。私自身のダンス活動を振り返ると、これまでに様々な動物を演じる機会がありました。魚、白鳥、猫、蛇、ハエ、狼、ハリネズミと色々やってきました。学生時代に恩師（お茶の水女子大学名誉教授の石黒節子先生）から与えられた役が「瀕死のハエ」だったんで

す。コメディではなくて、チャーホフの『タバコの害について』という戯曲があるんですけど、タバコの箱にハエを入れておくと震えて死んでいくって一節があって。その作品の冒頭でソロを作りなさいって言われて。それをどうやって踊ればいいのかってなった時に、必死にハエを観察したり、ダンテの『新曲』で狼の役を与えられた時は王子公園の動物園に行ったり、虎舞の稽古を見た後も YouTube で虎をひたすら観察したりしてました。

虎を踊るっていう、伝統としての虎舞、型もある洗練された部分を習得しながらも、クリエイティブに展開させていくには、「本物の虎に向き合ってみる」ってということもありかなって思いました。具体的にいうと、背中と尻尾の表現。虎舞においてはあまり重要ではないのかもしれないけど、



阪神虎舞 (2021)

私はそこを探るとすごく変身するんじゃないかなと思いました。あと頭と布っていう洗練されたフォーマットがあるなかで、実験の余地はあるのかなと思います。タブーなこともあるかもしれないですけど、2人（頭と布）がずっと離れて踊っていて、やがて合体するとか、少トリッキーな演出があってもいいのかなと。アクロバティックなリフトや振付も、実験・開発の余地があるのではないかなと思いました。動物を踊る作品ってバレエとか民族舞踊とか色々あるので、今後そういったものの図版や映像お見せしながら何かヒントになればいいなと思います。

もう一つ私が今一番気になっているのは、座談会の冒頭で文さんも述べられた「虎そのものになる」ことや「魂ごと乗り移る」といった感覚のことです。舞踏家の和栗由紀夫さんという方と10年ほど前に2、3作品ご

一緒したんですが、最近振り返る機会がありまして。舞踏の「なる」っていう感覚というものも一つのアプローチとしていいのかなと思います。今までに探してみた限りでは、舞踏の虎の型というものをまだ見つけられてはいないのですが。あとは、女性がいるってことがとても魅力だなと思います。女性だとわからないほど、ダイナミックな動きで踊られていることが単純にすごいなと思います。女性だけの虎舞っていうのも素敵だなと思いますし、楽しみです。

最後にもう一つ、橋本さんの著書『震災と芸能—地域再生の原動力』

(追手門学院大学出版会／2015／148～157頁)で紹介されている、鶴住居虎舞の笛吹き岩鼻金男さんの「虎舞、祭囃子の笛が供養の笛に変わるまで」という文章が、虎舞の意味合いとして、気になっています。お母様と当時16歳のお嬢様を亡くされた方による文章で、虎舞は、祭りの華やかなものであると同時に震災の厳かなものでもあるのだなと思っています。

橋本: もともと虎舞は供養の舞ではなかったんです。基本的にお祝いだったりおめでたいものだったんです。城山も台村(尾崎町虎舞)も望む望まないとは関係なく供養とか鎮魂とかそういったコンテキストの中に放り込まれていったんです。担わざるを得ない状況だったと思います。岩鼻さんは自分なりに違う虎舞の意味を考えて構築していったと思うんです。私たちのプロジェクト自体も震災の記憶を風化させないよっていうことで始めたんですけど、今皆さんが思っているような新しいことっていうことは当初はあまり考えていなかったですね。

文: もともと橋本さんたちが虎舞をやらないかっていう話を持ってきてくださったのは、ここが新長田だからっていうのと、踊る人が集まってたからってというのが理由ですね。

橋本: 新長田っていうのが大きいですね。新長田と岩手三陸沿岸っていうのは共通の記憶っていうのがあると思います。

文: 鎮魂の日を持ってる街って日本中では多くないと思います。今でも1月17日は鎮魂のモードに包まれています。それが20年経っても毎年駅前では点灯をやっているし、今度は商店街でもイベントをやるんですけど。街の記憶を風化させないっていうことと東日本のことも風化させないって

いうきっかけを持ち込んでいただいて、お互いに繋がって行くのはいい文脈だなと思います。私自身このきっかけがなければ東北の郷土芸能の魅力をこんなに知ることはなかったし、見るだけではなく、実際にやってみることができるのはすごいことだと思います。自分のものになっていく感覚を身体で感じているのはやる側の醍醐味だなんて。

身体性あるいはトランスについて

中川：関さんに「なる」という話があったんですが、トランス状態になることってありますか？ 憑依みたいなこととかあるのでしょうか、あるいは常にコントロールされているのか。

村上：即興で動いてる時に一瞬我を忘れる時はあります。

森山：あんまりないですね。稽古中にテンションが上がることあるんですけど、我を忘れる瞬間っていう経験はないですね。

中川：コンテンポラリーダンスだと、自分でちゃんとコントロールしながら表現しているんですかね。芸能では憑依というか何をやったか覚えていないっていう場合もあるという方もいらっしゃったので。

森山：人によるかもしれないですね。踊るものにもよるかもしれないです。我を忘れるぐらいのエネルギーを持って踊る作品もあるし、決まった振付がある場合もあるし。

中川：虎舞している時はどういう感じなんですか？ 肉体的にも極限に近づくだろうし。

山本：虎舞はむしろトランス状態にはならないと思いますよ。そう見えるのはいいことだと思いますけど。

関：頭や布の中で踊る虎舞は、自由な身体ではなく制限がありますよね。自分自身が踊るのではなく、虎を踊らせないといけない状態だったり、視界が悪かったり、息苦しかったり、身体へ負荷をかけてますよね。古今東西の伝統舞踊では、仮面を被ることによってトランス状態に導かれる事例もあります。皆様のお話では、頭を持って身体には負荷がかかっているけ

ど、内面は極めて冷静に舞われているようですが、実際、どういう感覚なのでしょう？

遠藤：トランス状態っていうのとは違うとは思っているのですが。虎をかぶって演じるっていう状態になると、やっぱり自分の身体性とは違うものになると思っています。



城山虎舞 (2018)

僕はこうやりたいけど、それをビジュアル的に実現するためには結構違うプロセスを経ないとそういう風には見えないと思います。だから僕にとっての右手はこの右手だけど、虎を被ると右足がその右手になる。僕が首を上げたからって虎が首を上げたことにはならなくて、首を上げるためには腕を上げないといけないとか。そういう客観的な視点がないと自分が何をやってるのかわからないっていうのはあると思います。ある種この体から世界を見てるんじゃないくて、もっと俯瞰したなにかを自分がやっているけど自分がやってないような。そういうちょっとレイヤーがずれた感じで体を運用していくっていう感覚は、トランス状態ではないけれども自分自身なのかどうかっていうのはあやふやになる不思議な感覚なのかなと思います。普通の踊りをやっている時にはない感覚なのかなと思います。

橋本：前に城山の金崎晃洋くんが自分の鍛錬のために他人の舞をみますかっていう質問に対して、それはあまり見ないで猫みるんですって言っていました。それって虎になるために、身近なところで観察しているということだと思うんですけど。小さい時からやっている川端さんはどうですか？

川端：やっぱりありますね。こう動かしたらこう見えてるだろうなって思って、実際動画とか撮って第三者から見たときにどう見えているかなって確認した時に、全然違う動きになっていたりすることがありますね。あと

は私も動画とかで虎とか猫とかみて、少しでも本物に近づくような動き方を探っています。

今井：人間としての使い方ではないですよ。それを実際にやりながらアジャストしていくってことだと思います。だから長年やっている人は虎頭を被った瞬間そのものがパッと切り替わると思います。モードが切り替わるっていう感じですねよ。

川端：物心ついた時からそばに虎舞があったので、そんなに細かいことは考えたことなかったですけど。頭を被ったら気持ちは変わりますね。魅せる踊りをしないと。どんな風に踊ろうかなって考えながら。

遠藤：気持ちの面で言ったら、ダンスにおいてもオンとオフの状態であるなっているのはあります。舞台にただ立つにしてもオンとオフの状態とで随分身体の形やこれからどう体を動かすのかっていう感覚に違いが出てくると思います。そういう意味ではダンス的に共通している部分はあるのかなと思います。

これから

文：オリジナリティっていう言葉が冒頭からキーワードとして出てきていると思いますが、アプローチの仕方としてさっき関さんからのアドバイスもあったと思います。来年は寅年っていうこともあり、例年よりも活躍の場は広がりそうな予測もできます。せっかくなので、新しい挑戦として何か一步踏み出せるといいのかなって期待も込めて思っています。オリジナリティって言ってもね、どこから手をつけたらいいだろうっていうことはあると思います。あるいはその色々なチャレンジは今までもしてきたので、阪神虎舞として来年どの角度から手をつけていこうかっていうことを少し話せたらいいなと思いますがいかがでしょう？

森山：もともと私たちが虎舞をやるきっかけが震災を風化させないっていうことだったと思います。新長田という場所でやることによって、震災の供養と虎舞っていうものがより密接に繋がったと思います。だから鎮魂歌みたいなものになったらいいなと思います。新長田でやる意味がすごくあ

るんじゃないかなって思います。鎮魂歌ってどこの国にもあると思うので、新しい曲とかを創作してそれで踊れたらいいなって思いました。

文：その場合、音楽っていうのがキーワードになりそうですね。鎮魂歌っていうのは手踊りじゃなくて虎舞？

森山：虎が鎮魂歌を踊るっていうことが重要かなと思いますね。魂の強さを虎で表現したいなって、個人的にですが。

井原：私の場合はみんなとは少し違ってくるのかなと思います。妊娠出産があって1年半くらい虎舞を舞うことからは遠ざかっていたので、外から虎舞をみる機会が多くありました。だからみんなの成長をととても感じているし、上手くなったなってとても思います。このタイミングでやっと次に行けるのかなっていうのは外から見ても感じますね。来年はそういった一歩踏み出すタイミングなのかなと思います。あとは私自身、早く踊りたいなって。でもみんなとの間にできてしまった差みたいなものはすごく感じていて、なんとも言えない気持ちです。子供も小さいしすぐに復帰することは難しいし、もどかしさは感じています。妊娠がわかった時もこれからどう虎舞と付き合っていこうかなってとても考えました。辞めることももちろん考えました。でも上手に関わっていくことはできないかなって思って、女性メンバーがいたらこういった問題って出てくるなって思っていて。その時に辞める以外の選択肢もあって、それぞれがうまく虎舞に関わっていけたらいいなと思っています。メンバーも増やしていきたいなと思っています。だから新長田っていう場所と町の人たちが阪神虎舞にどう関わってってもらえるか、どうアクセスしていくかっていうことも考えて活動していけたらいいなって思います。

文：これは私の個人的な思いですが、日本の郷土芸能の中で代々続くものとか家族ぐるみで伝わるもの繋がるものみたいなことがあると思います。それは新しい命が誕生したり、年寄りが亡くなっていったり循環していくものなんだなって思っていて。例えば今の未来ちゃんが、子供を抱っこしていたり、2、3年後はまた風景が変わっていたりって、そのなかで今関わられるような関わり方がこの場所で出来るようなになったらもっと参加しやすくなると思います。だから自分なりの関わり方で関わられるような、余

白があるような団体になっていけばもう少し膨らみもてるかもしれないですね。



城山虎舞 (2018)

